

# しろあとだより

第17号  
2018年10月

高槻市立  
しろあと歴史館

## 史料紹介 『高槻年代記』について

西本 幸嗣

### 解説

『高槻年代記』（個人寄贈・当館蔵、以下『年代記』）は、高槻藩士・小澤家に伝来した古記録である。小澤家は、高槻藩において、徒士目付や御広間番、元々役などを勤めた石高五〇石の藩士であった。『年代記』は、十四・〇cm×二〇・〇cmの横半帳の形式で九丁からなる。筆跡から、大半が同一人物による写しであるが、七丁目以降は異筆で筆跡も荒い。

高槻藩永井家初代の藩主である永井直清が誕生した天正九年（一五八一）から、八代藩主永井直珍の治世である明和七年（一七七〇）までの事跡を編年体で記録したものである。小澤家文書には、『年代記』以外にも、直清から直珍までの高槻歴代藩主と奥方の生没年、戒名を記した「御家御歴代書」や永井直清の兄である尚政の系図を記した「永井家系図」などの古文書も伝来している。『年代記』は、藩主・永井家に関する史料を藩士が書き写したうちのひとつと考えられる。

『年代記』の記述は、歴代藩主の事跡を追いながら、徳川將軍家の代替わりや主な社会の出来事を書き込んでいる。地震や洪水などの天災、江戸や京及び藩領内での火事、彗星（上元星・ホウキ星など）の出現などもよく記録している。

藩主ごとに主な内容を見てみると、まず、全体を通じて、初代直清の事跡をまとめた部分が詳しい。元和元年（一六一五）、大坂の夏の陣での活動や、寛永期の離宮八幡宮や東寺五重塔の造営奉行、京都所司代や大坂城代の不在時の仮役を務めたことが記されている。また、藩主時代では領内

### 目次

史料紹介 『高槻年代記』について	西本幸嗣…………… 1
しろあと歴史館所蔵の武者錦絵について	川元奈々…………… 9

に所在する平安歌人伊勢・能因法師のゆかりの地を顕彰するなどの記述がある。二代直清の時には、摂津国の延宝検地を担当したり、三代直清の時には、高槻城下の八幡宮や野見神社の鳥居建立が取り上げられる。また、貞享三年（一六八六）に菩提寺・悲田院の仏殿建立及び直清木像の安置したことなどがわかる。四代直英の時には、元禄十年（一六九七）、幕府の一大事業であった摂津国絵図の作成が行われたことなども記されている。とくに、四代直英から六代直期にかけては、藩内の出火や芥川洪水、喧嘩口論などの記述が散見できる。七代直行の時には、寛延三年（一七五〇）に上宮天満宮の八百五十年忌開帳が行われたことなど興味深い。八代直珍の時には、藩内で軍事訓練を兼ねた鹿狩りがあった。また、明和七年（一七七〇）に初代直清の百回御忌法事が執り行われたこともわかる。

『年代記』を通じて、高槻藩の通史をみることもできる。特に藩内で起きた出来事は、現在の地域の歴史を知る手がかりにもなるため、今後、本史料を活用されることを期したい。なお、翻刻中は、判読不能文字を表わす。

### 史料翻刻 『高槻年代記』

（表紙 外題）

高槻年代記

天正九辛卯歳

永井直清侯、江戸ニ而誕生

慶長二丁酉

同三戊戌 豊臣秀吉公薨

同四己亥壬三 関ヶ原陣

同五庚子 同六辛丑 壬十一 同七壬寅 同八癸卯

同九甲辰壬八 秀忠公任將軍 伝十郎直清仕

將軍 歳十四

同十乙巳

同十一丙午 江戸城建

同十二丁未 駿河城建 朝鮮人来

同十三戊申 壬四

同十四己酉 尾州名古屋城建

同十五庚戌 壬二

同十六辛亥 秀頼公上洛

同十七壬子 壬十 後水尾院

同十八癸丑

水野監物侯組二而

同十九甲寅 大仏鐘鑄 大坂冬陣直清侯供奉

元和元乙卯 大坂落城、五月七日、水野監物侯組二而

直清侯供奉、五月七日、安藤彦四郎、同場二而鎧武者

兩人、傳十郎方江掛ルヲ鍵ニテ突伏、一人家来高田

久右衛門卜切組ヲ又突伏、兩人ノ首ヲ取、右首二ツ

御帳付、傳十郎歳廿五、同年十一月知行五百

三拾石拝領之

同二丙辰、家康公薨

同三丁巳 後陽成院崩、八月廿八日 永井直吉誕生五月

同四戊午

同五己未 福嶋左衛門大夫御改易ニ付、芸州広嶋城

安藤対馬守・永井右近大夫口

上使

同六庚申 秀忠公女入内

同七辛酉 直清侯室卒五月十一日号法性院殿

谷中瑞輪寺江葬

同八壬戌

同九癸亥 家光公任將軍

寛永甲子

同二乙丑 永祿六癸亥三州大濱生

永井右近大夫直勝卒 十二月廿九日

同三丙寅

直清侯、「御加増拝領」直勝侯分知合

四千三十石 但、御分知三千五百石也

御部屋口之内御頂戴料

五百三十石ノ四十三石

同四丁卯

同五戊辰

同六己巳

同七庚午

女帝

同八辛未

同九壬申 秀忠公薨正月廿四日台徳院殿奉称

直清侯御書院御番頭被 仰付四月七日、御加増

同十癸酉

拝領都合八千石余、十月任従五位下日向守十一月十八日

直清侯於城州長岡勝龍寺御加増

拝領都合二万石侯、山城神足江初入

同十一甲戌 上洛、京都宿割、侯、奉七月

大山崎八幡宮造営、侯、奉九月

同十二乙亥

家光公、富士詠歌御自筆色紙於

御前、侯、拝領之 直吉 御目見

同十三丙子

江戸天守普請手伝、侯、奉

朝鮮人来

同十四丁丑

肥前嶋原陣

同十五戊寅

嶋原落城、永井直時侯誕生

同十六己卯

洛東寺塔再興、侯、奉五月

將軍ヨリ賜馬

寛永錢吹出ス

同十七庚辰

同十八辛巳 東寺塔造營、侯奉十二月

同十九壬午

同廿癸未 後光明院 朝鮮人來、日光山

正保甲申 將軍賜馬 上使、侯、奉六月

同二乙酉

同三丙戌 侯、城州勝龍寺江御暇被下刻、京司

板倉周防守在江戸之間、折々上京仕、禁中之事

相伺并洛中洛外之事定取計ニ而奉 賜馬

兵部直時 御目見改伝吉

同四丁亥 鳥羽コイ塚碑建、十月廿五日

移京悲田院今熊泉涌寺中江

慶安戊子 大坂城代阿部備中守卒 代 三月廿六日ヨリ 九月十日マテ

神足ニテ今板□□侯、大坂城中ニ在勤

討 同二己丑 直清侯、撰州高槻城捍領、七月廿四日

初八八月廿五日 神足ニテ石火矢十一挺鑄ス

三月

同三庚寅 能因塚石碑立、三月廿九日

同四辛卯 家光公薨、四月廿日、大猷院殿奉称

家綱將軍 伊勢寺碑銘立、誅油井

承応壬辰 古曾部村弁才天功德水涌出 七月十一日

弁才天像出現、林道春作記

同二癸巳 内裏火 六月廿三日

同三甲午 後西院 禁裏造營 直清侯奉行 三月方

明曆三酉年迄在京

服部兵助・村上左内喧嘩 十月廿八日

明曆乙未

同二丙申

同三丁酉 江戸火 桜田ヤシキフシ□

万治戊戌

同二己亥 直吉侯、病氣故、嫡孫直時侯養子タリ

直時公任叙従五位下市正 直賢誕生淀

同三庚子 大坂御城御手伝、侯奉七月十六日

寛文辛丑 内裏火 金万七郎左衛門・近藤彦左衛門ヲ討 御□討也

同二壬寅 大地震五月朔日

同三癸卯 靈元院

同四甲辰 京司牧野佐渡守在江戸中、侯在槻城、洛中之事務

同五乙巳 大坂天守雷火 正月二日

服部村高屋無益籠十二月廿一日

同六丙午

同七丁未

同八戊申

同九己酉 永井左門直吉侯卒、六月廿六日、号妙解院殿

同十庚戌

同十一辛亥 直清侯卒、正月九日、号宗明院殿、八十一

直時侯、許城主、三月、直時公初入十一月

芥川堤、中瀬助五郎、親ノ敵ヲ討

同十二壬子

延宝癸丑 内裏火 五月八日 「(見消し) 直時侯高槻初入」

法皇御所作事奉行 八月十日

同二甲寅 右奉行 四月廿五日終、東組火十月

同三乙卯 禁裏還幸固 侯行十一月廿七日

同四丙辰 給人廿人、京都火消号遠方番 五月

朔日 紅葉山火消、侯奉五月十八日

法皇女院御所炎上、十二月廿七日

同五丁巳 撰州之内三万八千石檢地、侯奉

直種侯任日向守十二月廿六日

同六戊午

同七己未 直種公初入四月三日、十月朔日參府

同八庚申 家綱公薨五月八日、奉称嚴有院殿

直時侯卒七月十八日、直種侯許城主壬八月十九日

綱吉將軍、馬場先御門番、侯奉

天和辛酉

同二壬戌 紅葉山御宮御仏殿火之番、侯奉三月廿二日

同三癸亥 直吉公夫人源照院殿卒十月八日

貞享甲子 靈台院尼侯、京屋鋪へ移徒四月十三日

紅葉山御宮御仏殿火之番、侯奉三月十二日

稲葉石見守屋鋪、当分御預受取八月廿八日

先侯夫人栄昌院尼公卒十二月廿九日

同二乙丑 光物二月廿二日、紅葉山火消正月十九日

日向守改近江守七月十七日、城下八幡鳥居建

同三丙寅 伝通院法事奉行六月五日

日光祭礼奉行九月十七日

悲田院御仏殿建、御木像安置

同四丁卯 東山院

元禄戊辰 鵜殿村夙ノ者誅罰二月晦日

同二己巳 城中天王社鳥居建立、正月廿九日□□□□

伊織様御出生

同三庚午 城米二万石引、二千石預十月廿三日

同四辛未 大坂鉄砲薬刎鳴動、高槻へ聞六月六日

同五壬申 高野山行人学寮騒動七月

直種侯夫人玉雲院卒二月廿六日

同六癸酉 公、苅田村・七道村御巡見、大坂御越七月六日

同七甲戌 粟生村金山鑿七月十九日

南掛村又右衛門斬罪

同八乙亥 直種侯卒四月廿二日、直達侯治世

伝之助、直英侯誕生七月十日母家女

同九丙子

同十丁丑 摂津国絵図壬二月四日

同十一戊寅 新大橋火消九月廿七日

土橋町火二月十四日

高西町火六月、付火女火罪八月十二日

同十二己卯 番田悪水拔正月十一日、高槻大風龍昇

山田火十月廿一日、本丸竊入十二月廿九日

本多金右衛門・同数馬御預十二月廿五日

預り人着正月十日、本多数馬死去五月七日

同十三庚辰

同十四辛巳

同十五壬午 天神八百年忌

播州赤穂城主浅野内匠頭五万石、侯家臣四十七士

主人ノ仇、高家吉良上野介ヲ討、十二月十四日

同十六癸未 永井直期侯誕生三月三日

宝永甲申 本多金右衛門死去十一月廿九日

小石川普請奉行五月廿九日

同二乙酉 伊勢寺鐘鑄四月朔日、童男女又ケ参宮

蔵屋鋪雷落五月五日

桜田ヨリ糺町工移十月四日

同三丙戌 直達侯卒七月晦日、直英侯治世

同四丁亥 大地震十月四日

富士山焼、江戸方角火消

同五戊子 内裏火三月九日、大坂火十二月廿九日

同六己丑 綱吉公薨

家宣將軍

三ノ丸裏桂火四月九日

侯任備後守四月廿五日

同七庚寅 中御門院

正徳辛卯 朝鮮人来

号智勝院

照蔵主尼公卒三月十四日

桜田古屋鋪江カエル

同二壬辰 家宣公薨

家綱將軍

同三癸巳 伊ガ町菊池好謙ヤシキヨリ火五月十日

神内ニテ服部喜藤太始五士馬士卜口論四月廿日

三ノ丸裏火

同四甲午 直英侯初入八月十五日

大風八月九日

侯夫人卒十一月四日、号向陽院殿

同五乙未 直英侯卒、正月十七日直期侯治世

江州小松村檢地、侯奉八月十六日

享保丙申 家綱公薨四月晦日

吉宗將軍

本町大火四月十日 巡見十月廿七日

同二丁酉 靈臺院尼公卒十一月廿六日

数寄や橋内石川近江守侯ヤシキト入□ 南都興福寺火

同三戊戌 深瀬団右衛門死刑五月二日

馬町火二月、城内田中氏ヤシキ火十月十六日

田中并会所火壬十月廿日、付火人田中伊右衛門臣

清藏火罪十二月廿三日

同四己亥 野田ヤ火六月二日、九月廿七日鳥養八丁ニテ坂本氏喧嘩

疋田母子殺二男九月廿七日

同五庚子 直期侯初入

同六辛丑 やワタ町火、堀内三弥組雷火

同七壬寅 京都火消、侯奉 ハシマリ

同八癸卯

同九甲辰 大坂大火三月廿一日

同十乙巳 馬町火

同十一丙午

同十二丁未

同十三戊申 將軍、日光御社參四月

同十四己酉 南越象渡四月

川嶋佐右衛門、於西面村喧嘩二月廿八日

同十五庚戌 侯、日光社參、紺屋町火十月十九日

同十六辛亥 流之助直行侯、高槻ニテ誕生三月廿四日  
城米御改六月十一日 日輪ノ内ニ黒点アリ四月五日

同十七壬子 法皇靈光院崩、江戸数寄や橋上屋敷火三月廿八日

侯、般舟院奉行八月廿六日 小林孫六・大音伴次郎喧嘩四月五日

同十八癸丑 一家中願上ル

梅原儀兵衛、諸堤多四郎ヲ殺三月十八日

同十九甲寅 侯夫人卒七月二日、号靈光院殿

石原佐一右衛門、丹州南掛江送

同廿乙卯 今上皇帝

元文丙辰 侯仕日光山四月廿日

金銀改

出丸高角左衛門長や方火十二月廿八日

同二丁巳 仙洞中御門院崩

侯、般舟院奉行五月八日

大藪和太八・西河原庄所涉瀬堤ニ而広瀬村百姓を

殺ス二月十九日 六月十三日

浅山矢十郎、於伊勢寺、安達八郎右衛門・三嶋文太郎

同祖母殺出奔、矢十郎伏見ニ而受取七月十八日

同三戊午 当町八幡額再興、安達氏筆

小笹新吾人殺三月三日

同四己未 城内天王裏平手屋敷ヨリ火

三月三日

同五庚申 芥川洪水六月九日、同洪水八月五日

女盗人捕三月十八日、小川三右衛門・福田門弥ヲ討

七月十六日ノ夜、者頭山田郡大夫組共暇十月

寛保辛酉 伊賀町長比万右衛門屋鋪ヨリ火

四月廿七日

法然上人石棺、京都屋鋪有来ノ処、

西山光明寺送

同二壬戌 古曾部邑弁才天功德水再

涌出正月廿七日 上元星出ル

城州八幡神木楠ヨリ火出正月十五日

同三癸亥 古曾部弁財天開帳 三月廿日ヨリ四月廿日マテ  
一組ニ而足輕二人死滅ス

延享甲子 直行侯、出府二月廿八日

東組火四月六日

直行侯任近江守十二月十六日

神野若狭守侯巡見十一月

同二乙丑 惣持寺開帳 三月三日ヨリ九十日

望月孫四郎、江戸ヨリ着、隠居四月七日

同三丙寅 給人拾八人願上ル

同四丁卯 右願之給人隠居暇二月廿一日

来辰夏、朝鮮人来聘ニ付、牧方御馳走

侯奉

寛延戊辰 直期侯、隠居、直行侯治世正月

直行侯初入三月五日

朝鮮人、牧方江四月廿九日着、御馳走、侯勤

京都火消七月七日

同二己巳 八幡町火九月廿七日

同三庚午 仙洞御所崩

北山天神八百五拾年忌開帳 二月廿二日ヨリ廿五日マテ

二条天守雷火ニ而炎上八月廿六日之夜

宝曆辛未 京火消止七月

同二壬申

同三癸酉 御城米改十二月廿二日

同四甲戌 魚屋町火二月三日

曆改ル 侯、奥方入、四月三日九鬼河内守侯女

同五乙亥 伊賀町池尻喜内ヤシキ手アヤマチ

八月十五日同人、下女ソメ入牢同月

同六丙子 淀天守火正月四日

池尻下女主人ノ宅エ仍火付科西ノ河原ニテ

火罪

日光

御名代御控四月二日

弘之助様、江州薩摩邑 西本願寺派善照寺御養子  
御越京都マテ御出張、同所ニテ御剃髪

御児子御名 弘千代丸御剃髪

又蔵卿様卜御改同月廿三日ノ夜、江州エ

御出立

洪水芝生堤切九月十八日

江戸上屋敷御類焼十一月廿三日巳之上刻

豊姫君飛鳥井家エ 御入輿十一月廿八日

同七丁巳 侯、病氣九月 仍而参府延越年

侯奥方離縁

直行侯卒四月廿二日、同廿六日出棺悲田院エ

奉葬、号本真院殿月洞宗郭大居士

永井数馬直珍侯、御家督六月十九日

同八戊寅 南堀側市川六大夫屋鋪火七月八日夜

北堀側沢田作大夫屋鋪火十一月九日夜

同九己卯 侯、奥方千代姫女入輿六月廿六日

本多下総守様養実牧野駿河守様御隠居

民部少輔様御女也

木津川分水御見分ニ付、撰河民騒動十月十七日

伊賀町長谷川弥右衛門屋鋪ヨリ火

十二月廿九日

同十庚辰 南堀側 竹村儀兵衛左衛門長屋ヨリ火

侯、御初入七月廿日

三月廿三日夜

將軍宣下九月

但三月

家重公右大臣御転任 御本丸 五月十三日

家治公右大将御兼任 西ノ丸 御移替

家重公

大御所様と奉称

家重公〔見消し〕家治公〕

上様と奉称、將軍宣下相濟

公方様と奉称

同十一辛巳 法然上人五百五十年忌

親鸞上人五百年忌

大御所様薨御六月十二日

万寿姫君様御誕生

侯、外桜田御門番奉

候、御勝手向御建替、見付足輕門番之処

侍番所改、中小姓並ヨリ歩行並マテ勤

土蔵番足輕之処、茶道坊主・料理人其外

会所無格役人・小役人相勤之

役人

会所二ノ丸ニテ勤

中間廿五人、足輕三十人、馬三疋減其外儉約

八重崎殿御暇

同十二年

御家御具足御祝儀、正月十二日之処、十五日改

御城内天王裏屋敷堀内火三月十六日夜

太鼓番屋二ノ丸御□所前所替五月三日

彦之助様御出府六月十三日・七月朔日

帶刀様と御名改

帝御姉君

緋宮様へ御踐祚七月廿日

禁帝 崩御 七月廿一日奉称

桃園院様

若君様御誕生十月廿四日 家基公也奉称

竹千代様

八幡町松原西角町家火十一月廿二日

来年 朝鮮人来朝之節、鞍□□□ 同晦日

「」様御入寺十二月十七日

翌正月御得□奉称 □□様

公辺 御男子様御誕生奉称

貞次郎様、翌未三月十六日御逝去

同十三未 龜山詰所朝鮮人御地走濟□

此□□ハ一人ニ而京火消御勤四月九日

太鼓番屋御厩息場旧所へ戻ル六月二日

水野筑後守様御死去ニ付

おつ□様御名 帶□院様御改

鞍皆具御免 八月四日

直珍公江坪井宗三、山鹿流□□御受申上ル

十一月廿三日

御即位濟 女帝様也 十一月廿七日

八之□殿帰参 十二月十七日

同十四申

朝鮮人来朝、牧方通 正月廿六日

泉原村山 御鹿狩 二月十五日

朝鮮人為帰国、牧方通 四月四日

年号明と改元 六月十三日

新川町理安寺。西脇町家火 七月七日

村々方子供踊差上□昼□前二而七月十六日

御覽

為御参府御発駕 九月二日

周室様御遷化 九月廿三日奉称

□国前第一座□□□□□

帶□様御名 吉之助様御改 十二月三日

京火消 御免 十二月廿九日

明和二丙 紺屋町門之外町家火 廿式軒焼 二月廿二日

東照権現様百五十四御忌 四月十七日

直期公御逝去奉葬御光□奉祚

三経院殿□□□□□

吉之助様安藤家へ御養子 六月廿四日

十二月 帶部様と御改

東堀側伊藤四郎屋敷火 十月十九日

京火消ニ蒙 仰 十一月十三日

若君様御名之通様 奉称家基と 十二月二日

御帰城 十二月廿五日

同三戌 永井信濃守様へ

お栄様御婚礼 二月廿三日

車作村山御鹿狩 同廿六日

おきみ様御名 お和□様と御改三月廿四日

奥様□□□へ御湯治 三月十五日

若君様□□奉称

大納言様 四月七日

於二ノ丸 御男子様御出生奉称

虎之助様 四月廿二日申上刻

御城内藤井□□屋敷火 七月四日

大坂方遣御役人□□芝居来、於二ノ丸

御覧 七月十一日

明和四丁亥 正月廿四日

梶原村火

四月廿九日

芥川町火 裏小家故

御届無之

三月

三ノ丸下台所取払

三月十六日 二ノ丸二而

お数様御誕生

五月十九日 御参府 六月三日 八月廿五日

九月十一日 信齊様百回忌 山形大弑死罪 吹上上覽所前江出火之節詰

九月十九日 親王御方禁裏江御移 准后新造御殿江御移

九月十九日 准后新造御殿江御移

明和五戌子 五月廿七日未刻

芥川満水 庄所領之内ニ而堤東面ニ切レ、御城下

地低成所迄押水来 八月廿一日 御城着

九月朔日 郷中賄山 二ノ丸会所山本会所二成

悲田院江高岳長老住職

□之助様御誕生九月廿九日 江戸上屋敷二而

九月朔日

郷中賄山 二ノ丸会所山本会所二成

□之助様御誕生九月廿九日 江戸上屋敷二而

明和六己丑 三月十九日

成合村山御鹿狩

六月廿五日 七月廿六日夜比方八月八日比迄見え

吹上出火詰 ホウキ星出 丑寅ヨリ出アケカタ八ツ時上ル

九月 九月

女院御所境内火 大学様御名主税様と御改

十一月九日 十二月廿七日 五月十七日

大納言様西丸江御移 梶原村火 銘之助様御逝去

十二月九日 宗明院様来寅正月百回御忌御法事御取越

十二月九日

宗明院様来寅正月百回御忌御法事御取越

明和七庚寅

一 虎之助様 五月御出府、同十七日御着府、同廿三日

御数様 虎之助様 公辺へ御出生御届相済

直期公御女

一 お幾様 添田□作様へ御戻し御客分被成□□候 五月

一 五月七日之夜比方東南方方ほんほりとミゆる星出来而ハ

小方丑寅之方へ入、十二日之夜方不見

一 五月十三日夜戌上刻星月ヲツラヌク

但、酉上刻月ノ東ノ方ニ星有り、戌刻月へ入

同其上刻月ノ西少シ上ツラエ星メケ出ル

一 旱魃 五月廿八日雨降余程ふり、是ニ而田植出来

六月廿九日同晦日降十日斗之潤二成、閏六月

不降七月廿五日三日斗潤弥降

七月廿八日之夜戌中刻方

一 北良がかり 赤氣立筋有、昼夜なれ共、光り

地を照、物之あや見ゆる、海焼と申、丑ノ刻比赤

東西へ敷り消ル

東西へ敷り消ル

東西へ敷り消ル



## しろあと歴史館所蔵の武者錦絵について

川元 奈々

はじめに

しろあと歴史館では、戦国時代の武将たちが描かれた錦絵を収集している。平成三〇年（二〇一八）には、企画展「憧れの戦国武将―武者錦絵の世界―」を開催し、これらの錦絵を一挙に展示した。

錦絵は、浮世絵の版様式の一つで、多色刷りの木版画のことを言い、美人画、役者絵、花鳥画、風景画、戯画など多くのジャンルが展開している。武者錦絵もそのうちの一つで、武者絵すなわち甲冑姿の武士の姿を描いた錦絵のことを指す。

本稿では、武者絵・錦絵の歴史についての簡単な説明と、当館所蔵の武者錦絵について紹介する。なお、本稿の多くは以下の論考に依拠している点を予めお断りしておく。

- ・岩切友里子「浮世絵武者絵の流れ」（町田市立国際版画美術館『浮世絵大武者絵展』二〇〇三年）
- ・岩切友里子「武者絵の世界」（渋谷区松濤美術館『武者絵 江戸の英雄大図鑑』二〇〇三年）
- ・佐藤至子『江戸の出版統制 弾圧に翻弄された戯作者たち』（吉川弘文館、二〇一七年）
- ・菅原真弓「武者絵の研究―歴史画―としての視点による一考察―」（『哲学会誌』二三、一九九九年）
- ・菅原真弓「浮世絵師・落合芳幾に関する基礎的研究」（『京都造形芸術大学紀要』二〇、二〇一五年）
- ・日野原健司「浮世絵師の描いた戦国武将の肖像―信長・秀吉・家康―」（太田記念美術館『浮世絵戦国絵巻―城と武将』二〇一一年）
- ・森山悦乃「歌川国芳の太平記英勇伝」（財平木浮世絵財団『平木浮世絵文庫3 歌川国芳 太平記英勇伝』二〇一一年）
- ・大阪城天守閣『浮世絵師が描いた乱世』（二〇一八年）

### 一 武者絵・錦絵の歴史

一七世紀後半、菱川師宣が墨一色で刷られた墨摺絵を成立させた。これに彩色を加えたものが錦絵の原点となる。しかし、当時は版画の技術が未発達であったため、現代の塗り絵のように、墨摺絵に筆で色をつけられるのみであった。

彩色が版画で行われるようになったのは、一八世紀中頃のことである。はじめは紅や緑を主とする少ない色数の色摺り木版画（紅摺絵）であったが、明和二年（二七六五）に狂歌師のサロンで絵暦の交換会が行われたことを契機として版画技術は急速に進展することとなった。特に、この交換会に参加した鈴木春信は、彫師・摺師と協力して技術を開発した。結果、多くの色を正確に摺り分け、錦のように華やかで美しい彩りが加えられるようになった。

ところで、浮世絵において武士（武者）は好まれた画題の一つであった。特に錦絵では、当世以前の豪傑の俗説武勇譚、著名な武者の争闘場面、文芸に登場する架空の英雄豪傑の活躍などが絵画化された。

武士をモチーフにした絵画は古くから見られる。鎌倉～室町時代には「合戦絵」と呼ばれる、戦争全体の状況や、合戦の記録を描いたものが多く残されている。自らの正当性や恩賞の根拠を示すためのものであり、武者錦絵とは性格を異にする。武者錦絵の直接的なルーツとしては、武者絵馬と考えられている。武者絵馬は、室町時代頃から登場し、特定の武将の英雄的風貌や史上に有名な戦闘シーンがドラマティックに描かれている。また、戦国時代末頃から軍記物語の出版に伴い挿絵に武士の姿が描かれるようになる。人びとの間で場面ごとに共通のイメージができあがり、このイメージが錦絵にも引き継がれた。

しかし、当時描かれていた武者絵は、誇張や単純化された表現によって描かれており、精緻さを欠いていた。これが細部まで精緻に描かれるようになったのは一八世紀後半以降、北尾重政・勝川春章らが新しい画風を確立してからのこととなる。

こうした新しい武者絵の流れを、さらに推し進めたのが『絵本太閤記』の出版である。『絵本太閤記』は、戯作者の武内確斎が寛政九年（二七九七）から享和二年（一八〇二）にかけて刊行した、太閤すなわち豊臣秀吉の一代記である。秀吉に関する著作は多く、秀吉存命期より見られるが、時代を

経るごとに脚色が加えられている。『繪本太閤記』はこうした著作から取材し、大幅に加筆や再構成されたものであった。

『繪本太閤記』は、庶民の間で大流行した。挿絵が多く使われていることで、字の読めない人々までもが視覚的に戦国武将のイメージを捉えられるようになったという点において、同書が果たした役割は大きい。そして、同書の流行を受けて、挿絵をもとに描かれた錦絵もまた多く出版されるようになった。

しかし、文化元年(一八〇四)に『繪本太閤記』は幕府から絶版を申し付けられ、『太閤記』を元にした錦絵を描いた絵師たちは処罰を受けることとなった。絶版の理由として、錦絵に太閤記の時代の武者の名前や紋所、地名などの記載が問題となったことが明らかにされている。すなわち、自分の先祖に直結する戦国武将の逸話や巷説の中には、徳川將軍家や諸大名といった為政者にとって都合の悪いものが多分に含まれていたと考えられる。

ところが、武者錦絵の人気はとどまるところを知らず、さらなる発展を遂げる。当時、武士が描かれた錦絵は一枚物の中に英傑個人が描かれたものが主流であったが、次第に三枚続きの大画面で描かれるようになった。この画面の拡大により、俯瞰的な視点を伴った戦場図や巨大な物体を描くといった新しい構図が生み出されることになった。

文政一〇年(一八二七)、歌川国芳によって「通俗水滸伝豪傑百人」シリーズが刊行されると、国芳の武者絵は人気を博した。国芳の絵の特徴は、三枚続きの画面を活かしたダイナミックな構図と、画面からはみださんばかりの人物の力強い躍動感である。また国芳は、古典軍記の英雄ばかりを扱うのではなく、当時流行していた読本の世界も錦絵化して武者絵の題材を拡張した。この国芳の手法は弟子たちにも引き継がれ、天保期(一八三〇〜四五)以降の武者絵は、ほぼ国芳とその門下によって占められることとなった。

幕末になると、外国船の来航や薩英戦争、長州征伐など、当時の時事的な事象が古代の武者合戦に名前を借りて錦絵に描かれた。また、この頃は「横浜絵」と呼ばれる居留地やそこに滞在する外国人を描いた錦絵も描かれるようになった。

明治時代になると、新政府の「尊皇愛国」を掲げる徳育的歴史教育の視

覚的メディアとしての役割を担うようになった。明治二年(一八七九)の「教学聖旨大旨」小学条目には、「当世小学校ニ絵図ノ設ケアルニ準シ、古今ノ忠臣義士、孝子節婦ノ画像・写真ヲ掲ケ、幼年生入校ノ始ニ、先ツ此画ヲ示シ、其行事ノ概略ヲ説諭シ、忠孝ノ大義ヲ第一ニ脳髓ニ感覺セシメンコトヲ要ス」とあり、メディアとして図像を用いることを推奨している。また、明治二年四月一八日の読売新聞では、「教導立志基 錦面掲図 五拾枚ノ該画各府縣小学校に於いて修身口授標準に御採用相成、日々御注文に付、今般教場掲図に仕立(後略)」ともあり、「掛図」と称された錦絵が小学校教育の場で使用されている様子が窺える。この頃には、新聞紙上に挿絵として錦絵が用いられるようになった。

しかし同時に、西洋の印刷技術が日本国内でも実用化され、大量印刷や写真の印刷が可能になったことで、徐々に錦絵は衰退していった。一時は、日清戦争の戦争場面を描いた錦絵で人気が出るも、その後続くことはなく、明治の終わりにはほとんど出版されなくなった。

## 二 しろあと歴史館所蔵 戦国武将の武者錦絵

本章では、当館所蔵の戦国武将に関する武者錦絵を紹介する。

シリーズで出版されたもののうち、「太平記英勇伝」「新撰太閤記」「瓢軍談五十四場」については複数点所有している。以下、簡単に紹介する(目録参照)。

まず「太平記英勇伝」は、慶応三年(一八六七)、落合芳幾によって出版された全百枚の揃い物で、条野採菊が詞書を添えている(以下、芳幾版とする)。

落合芳幾は



太平記英勇伝「和伊賀守惟政」

	品名	点数	作者	判型※/寸法	時代	描かれた武将・場面
1	太平記英勇伝 和田伊賀守惟政	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	和田惟政
2	太平記英勇伝 中川瀬兵衛清秀	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	中川清秀
3	太平記英勇伝 高山右近友祥	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	高山右近
4	太平記英勇伝 松永弾正久秀	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	松永久秀
5	太平記英勇伝 明智日向守光秀	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	明智光秀
6	太平記英勇伝 明石儀太夫秀基	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	明石秀基
7	太平記英勇伝 音川兵部大輔藤孝	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	細川藤孝
8	太平記英勇伝 堀久太郎秀政	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	堀秀政
9	太平記英勇伝 豊臣秀次	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	豊臣秀次
10	太平記英勇伝 福島左衛門太夫正則	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	福島正則
11	太平記英勇伝 小西摂津守行長	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	小西行長
12	太平記英勇伝 朝野弥兵衛永政	1	落合芳幾	中判錦絵	慶応3年 (1867)	浅野長政
13	新撰太閤記 丈夫相心ヲ咨ル	1	歌川豊宣	大判錦絵二枚続	明治16年 (1883)	豊臣秀吉 佐々木義秀
14	新撰太閤記 不義の計略の中せず	1	歌川豊宣	大判錦絵二枚続	明治16年 (1883)	和田惟政 足利義昭 細川藤孝 三淵藤英
15	新撰太閤記 妙手の眼ハ盤中ニ普し	1	歌川豊宣	大判錦絵二枚続	明治16年 (1883)	豊臣秀吉 黒田官兵衛
16	新撰太閤記 其勢如龍其猛如虎	1	歌川豊宣	大判錦絵二枚続	明治16年 (1883)	加藤清正 四天王(但馬守)
17	新撰太閤記 損じたる器ハ英名の標	1	歌川豊宣	大判錦絵二枚続	明治16年 (1883)	丹羽長秀 山崎合戦
18	新撰太閤記 不義之鉄石ハ義之片礫より軽し	1	歌川豊宣	大判錦絵二枚続	明治時代	本多忠勝 小牧の陣
19	瓢箪談五十四場 第四 此下宗吉普請破損をおさむ	1	歌川芳艶	大判錦絵	元治元年 (1864)	清須城割普請
20	瓢箪談五十四場 廿四 赤松水責防戦難儀におよぶ	1	歌川芳艶	大判錦絵	元治元年 (1864)	備中高松城攻め
21	瓢箪談五十四場 三十三 久吉道秀天王山をあらそう	1	歌川芳艶	大判錦絵	元治元年 (1864)	堀尾吉晴 山崎合戦
22	芳年武者無類 松永禪正久秀	1	月岡芳年	大判錦絵	明治16年 (1883)	松永久秀
23	名将四天鑑 小多春永公	1	歌川芳虎	大判錦絵	慶応3年 (1867)	豊臣秀吉 滝川一益 明智光秀 柴田勝家
24	英雄三十六歌撰 柴田勝家	1	右田年英	大判錦絵	明治26年 (1893)	柴田勝家
25	武智光年大多春忠の居城をせめる図	1	歌川芳虎	大判錦絵三枚続	慶応2年 (1866)	明智光春 織田信忠
26	山崎大合戦之図	1	月岡芳年	大判錦絵三枚続	慶応元年 (1865)頃	高山右近 羽柴秀吉
27	山崎大戦之図	1	月岡芳年	大判錦絵三枚続	慶応元年 (1865)頃	中川清秀 加藤嘉明 明智光秀 齊藤利三
28	大日本六十余将 摂津 真柴筑前守久吉	1	歌川芳虎	大判錦絵	明治時代	羽柴秀吉 織田信長葬儀
29	今古誠画 浮世画類考之内 慶長五年之頃 (細川忠興室)	1	小林清親	大判錦絵二枚続	明治18年 (1885)	細川忠興室(ガラ ンヤ)
30	教導立志基 (片桐且元・木村重成)	1	水野年方	大判錦絵	明治21年 (1888)	片桐且元 木村重成
31	家康大仁村難戦之図	1	楊斎延一	大判錦絵三枚続	明治20年代 (1887~96)	徳川家康 真田幸村
32	日本略史図 (真田幸村・徳川家康)	1	二代長谷川貞信	大判錦絵	明治11年 (1878)	真田幸村 徳川家康
33	徳川治蹟 年間紀事 二代台徳院殿秀忠公	1	月岡芳年	大判錦絵三枚続	明治時代	徳川秀忠 真田大助
34	忠義山崎合戦	1	不詳	大判錦絵三枚続	明治時代	鳥羽・伏見の戦い

高槻市立しろあと歴史館所蔵 戦国武将の武者錦絵目録

歌川国芳の弟子で、「一恵齋」や「朝霞楼」の雅号（ペンネーム）を有した。月岡芳年は弟弟子に当たり、当時人気を二分していたと伝わる。芳幾の活動は浮世絵のみにとどまらず、明治五年（一八七二）には「東京日日新聞」、同八年には「東京絵入新聞」の創刊に参加し、新聞紙上に挿絵を取り入れるという新しい分野を切り開いた。

一方、条野採菊は本名を桑名伝平といい、幕末から明治にかけて活躍した小説家である。「山々亭（弄月亭）有人」を雅号とした。

ところで、芳幾と採菊の共同活動は「太平記英勇伝」以外にも見られ、文久三年（一八六三）に採菊が編纂した『酔興奇人伝』に落合芳幾が挿絵を描いたり、「東京日日新聞」の創刊を共に進めたりしている。

なお、本作以前の嘉永初年頃（一八四八―四九頃）、芳幾の師である歌川国芳が同名のシリーズを出版している（以下、国芳版とする）。国芳版は五〇枚の揃いであったが、版面に含まれない下絵の存在が指摘されており、幾芳の「太平記英勇伝」これを完成させたものと想定されている（前掲森山論文。なお、森山論文が収録されている『平木浮世絵文庫3 歌川国芳太平記英勇伝』には国芳の全五〇作品がカラーで収録されている）。

国芳も芳幾も、一部を除き『絵本太閤記』のエピソードをもとに描いている。しかし、国芳版が武将の実名をもじった名前を付しているのに対し、芳幾版は実名で描かれている。「太平記」という書名、国芳が幕府の規制に配慮して時代と場面を移したものと考えられる。芳幾のころには規制が和らいでいたため、書名こそ師の「太平記」を引き継いだものの、武将の名前を実名としたと考えられる。

次に「新撰太閤記」は、明治一六年（一八八三）に歌川豊宣によって描かれた。豊宣は、三世豊国の孫で、歌川国久の長男であり、「一陽齋」「香蝶楼」の雅号を有した。当館には、「新撰太閤記」のうち六点を所蔵している。前掲目録の13は、永祿三年（一五六〇）、今川義元の侵攻を受けた織田信長の命によって木下秀吉が近江守護六角義秀に援軍を乞う創作の話を描いたもの。14は、暗殺の追手から、後の將軍足利義昭を連れて和田惟政らが逃亡する場面が描かれている。15は、天正六年（一五七八）から行われた三木合戦において、羽柴秀吉が黒田官兵衛孝高に作戦を指示している場面を、16は中国大返しの際、単騎で上洛を急ぐ羽柴秀吉に、明智方の四王天但馬守が急襲するという逸話を、17は山崎合戦における、織田家の重臣

丹羽長秀の奮戦を描いている。また、18は小牧（愛知県小牧市）で徳川軍と羽柴軍が対陣した際、羽柴方の離れ馬を返そうとしたにもかかわらず馬盗人扱いされたことに激怒した徳川方の猛将本多忠勝が、人ごと馬を羽柴軍の中に投げ入れたという虚構を描いたものである。

最後に「瓢軍談五十四場」は、『太閤記』

の様々な場面を描いたもので、矢矧橋（愛知県岡崎市）での蜂須賀小六との出会いから小田原攻めまでが、五四枚に渡って描かれている。作者は歌川芳艶。落合芳幾や月岡芳年と同様、歌川国芳の門人で、師の画風を色濃く受け継いだ武者錦絵で名を馳せた人物である。当館は本作のうち三点を所蔵している。前掲目録の19は、此下宗吉すなわち木下（豊臣）秀吉が主君織田信長の居城・清洲城（愛知県清須市）を割普請を行ったという逸話を元にして描いている。20は、秀吉が天正一〇年五月から清水宗治の籠る備中高松城（岡山市）を水攻めにした場面が描かれている。21は、信長を倒した明智光秀（画中では道秀）を秀吉が破った山崎の合戦の場面である。



新撰太閤記 不義の計略的中せず



瓢軍談五十四場 三十三  
久吉道秀天王山をあらそう

その他、前掲目録22以降のものについては、シリーズで出版されたものもあるが、当館が一点ずつしか所蔵していないものである。紙幅の都合上、ここでは高槻にゆかりのある錦絵三点に絞って紹介する。

まず一点目は、前掲目録22「芳年武者無類」である。月岡（大蘇）芳年が、明治一六年（一八八三）から明治一九年にかけて刊行した武者錦絵集である。松永久秀が自刃する直前に平蜘蛛の茶釜を投げ割ったとする場面が描かれている。松永久秀は当初、三好長慶に仕え、三好氏の下で大和国（奈良県）を支配。その後、織田信長に味方するも、後に対決して敗れ、自害した。出自は諸説あるが、東五百住村（高槻市）の土豪とする説が有力視されている。

次に26・27は、山崎合戦を描いた二作品である。26・27は、それぞれ三枚続きの錦絵であるが、26「山崎大合戦之図」の左端と、27「山崎大戦之図」の右端が繋がり、六枚一組の迫力ある絵に仕上げられている。錦絵自体は両軍の激突の場面を描いたものであるが、羽柴秀吉と明智光秀による山崎合戦において、秀吉は西国街道の天神馬場（高槻市・上宮天満宮から南にのびる道）に本陣を構えた。

最後に、36は大坂夏の陣で、二代將軍徳川秀忠が豊臣方に追い詰められ

た際、唐崎村（高槻市）の平六が秀忠を助けたとの話を元にしている。この恩賞によってくわんか舟が特権を得たとされるが、史実とは認められない。作者月岡芳年が「大蘇芳年」を名乗っていることから、明治六年（一八七三）以降の作品である。

### おわりに

近年、武者錦絵は再び脚光を浴びているように感じられる。二〇〇三年には町田市立国際版画美術館



山崎大戦之図

で「浮世絵 大武者絵展」、渋谷区松濤美術館で「武者絵 江戸の英雄大図鑑」が相次いで開催された。二〇一一年には太田記念美術館「浮世絵戦国絵巻く城と武将」が、最近では二〇一八年に大阪城天守閣で「浮世絵師が描いた乱世」が開催されている。当館が収集した錦絵の中で最も多くの作品の作者となつている落合芳幾を扱った展示も開催された(太田記念美術館「落合芳幾」二〇一八年)。



徳川治蹟 年間紀事 二代台徳院殿秀忠公

ようなイメージを抱いていたかがうかがえる史料である。それと同時に、博物館にとっては、来館者の視覚に直接訴えられる展示品としての役割も有している。

しかし一方で、史実と認められなかったり、当時の風俗とは異なったりする描写も多々見られる。そういった空想上のイメージが、そのまま来館者のイメージとして固定されうるという危険性も存在する。錦絵をどのように活用するかという点については、考えていかなければならない。

当館には今回挙げたほかにも、錦絵を所蔵している。いずれ別稿にて紹介したい。

発行日 二〇一八年一〇月六日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

大阪府高槻市城内町一番七号・TEL〇七二(六七三)三九八七

◆ホームページ：高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内掲載

[http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi\\_kanko/rekishi/](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/)

[rekishikan.chosa/shiroato/shiroato\\_dayori/index.html](http://rekishikan.chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html)